

調査出張報告書〔総務委員会〕

調査年月日	平成29年 9月 6日（水）	調査時間	13:30～16:15
調査先	東川町教育委員会、東川小学校 及び地域交流センター	実施場所	会議室
説明者	高橋議長、林教育長 外	現地視察等	校内見学、施設見学
調 査 概 要			
<p>1 調査目的</p> <p>平成30年度開校の高知国際中学校及び平成33年度開校の高知国際高等学校における国際教育の参考とするため、また地域と連携した学校づくりの参考とするため、東川町教育委員会の取り組みについて調査を行った。</p> <p>2 説明内容</p> <p>東川町では、1985年に「写真の町」を宣言し、「写真甲子園」を代表とした写真に関するさまざまなイベントを開催するなど、「写真写りの良い町づくり」を推進し、2014年、新たに「写真文化首都」を宣言し、写真文化の中心地として、「世界中の写真、人々、そして笑顔に溢れる町づくり」に取り組んでいる。今秋には「写真甲子園」の映画が劇場で公開される予定である。</p> <p>また、自主自立で町制を運営することを目指し、さまざまな取り組みを進める中、現在は北海道の中でも人口の減らない自治体に数えられている。特に教育に関しては、日本一の“子育て・教育の町づくり”を目標に掲げ、学社連携事業、学力向上事業、国際教育推進事業などに取り組むほか、外国人を対象とした町営の日本語学校も開設している。平成29年度は、文部科学省から国際教育研究開発学校の指定を受け、町内の1園6校を対象に、グローバル化した教育環境づくりを図るため、教育課程の研究開発を推進している。</p> <p>3 質疑の概要</p> <p>○ 移住してくる方は、どのような職業に就いているのか。</p> <p>レストランやパン屋などを開業する方、写真関係で東京と東川町の両方に拠点を持つ方、コピーライターのように会社に行く必要のない方などである。</p> <p>移住・定住するには、企業がないと難しいという話もあり、それも大切なことであるが、勤め先を用意しなくても、移住者自らが職を開拓し、起業して生計を立てるとというのが東川町の特徴である。新規就農の数は少なく毎年あるわけではない。</p> <p>○ 町営の日本語学校へ留学してきた方の卒業後の進路はどうなっているのか。</p> <p>向学心のある方は大学へ進学、すぐに勤めに出たいという人は札幌、小樽方面の会社に就職している。</p> <p>○ 平成6年度以降、人口増が続いているが、なぜ人口が増えているのか。</p> <p>教育環境が整っていることや近隣市町村よりも住みやすいというイメージがある。また、土日の移住希望者への対応や新規起業者への支援（上限100万円）を行っている。移住者の経営するカフェやパン屋、雑貨店などが町に点在している</p>			

ことで、そこを巡って楽しむ方も多く、起業した人が十分経営していける環境にある。

現在は、宅地開発をしてもすぐ完売、アパートも空くと同時に入居しており住宅が足りない状況となっている。

長い年月かかっているが、大きな企業を誘致するというよりも、個々の方々に認めていただいた結果である。

○ **全面移転・新築された東川小学校のほかに3校の小学校があるが、当該3校の将来の再編等についてはどのように考えているか。**

町の中に選択肢としてさまざまな学校を用意したいと考えており、当面は統廃合すべきではないと思っている。

また、スポーツ少年団の活動については、東川小学校で行っているため、周辺3校が参加しづらい状況にあったが、通う足の確保も進めており、地域に住んでいるからといって教育上のハンデとならないよう取り組みたい。

○ **取り組みのきっかけは何か。**

町長は、前例踏襲ではなく、町の福祉につながるものであればすぐに行うという考え方である。国の新しい取り組みについて町でプロジェクトチームを作って、職員にアイデアを出させることもしている。

ふるさと納税に関しても、東川町に寄付する方は株主だと、東川町のプロジェクトに対して投資をするんだということで、株主の皆さんに、年に1度東川町に来ていただいて株主総会も行っている。本当の意味で町を応援してくれる方々であり、町づくりのアイデアもいただいている。

4 調査の成果・委員会としての意見等

○ 写真の町の取り組みや子育て・教育に関する取り組みを主要な施策に掲げるとともに、市町村合併しないことを選択し、また大企業に頼らない、移住してきた方を含めて個々の町民の力が発揮できる施策など、7,000人を割った町の人口を20年間で8,236人に増やした取り組みは、県や県内市町村にも大変参考になる話であった。

○ 総面積16haの町立東川小学校・地域交流センターについて、実際に現場を見せていただくと、そのスケールと町長を初めとした町の教育にかける志の高さに圧倒される思いであった。旭岳の雄大な景色を臨む270mの日本一長い廊下のある平屋の小学校、コミュニティスクールのお手本ともいえる取り組みなど、「日本一の教育の町」を目指すにふさわしい施設や教育内容、子育て支援であった。この学校に通わせたいと移住を希望する人がいることにも納得するとともに、学校を中心とした地域づくりの大切さを改めて感じさせられた。

○ 東川町は町を挙げて国際教育に取り組んでおり、海外との交流も積極的に行っている。特に町立の日本語学校を設立したのは、地域の魅力ある取り組みの一つとして、高知県内においても参考にしたい。

調査出張報告書〔総務委員会〕

調査年月日	平成29年9月7日（木）	調査時間	9:30～10:45
調査先	旭川市科学館	実施場所	会議室
説明者	伊藤館長	現地視察等	施設見学

調査概要

1 調査目的

平成30年7月に開館予定の、図書館等複合施設「オーテピア」に設置される「高知みらい科学館」の運営や施設管理等の参考とするため、旭川市科学館「サイバル」の取り組みについて調査を行った。

2 説明内容

旭川市科学館では、常設の北国コーナー、地球コーナー、宇宙コーナーを初め、ユニークな企画展示などに取り組んでおり、小中学生や観光客など、幅広い入館者を迎えている。また、教育旅行の誘致も行っており、学校利用の手引を作成し、モデル見学コースや多彩な体験メニューを設定している。開館時には、対象年齢層は中高生を意図していたが、実際は、中学生以下の入館者数が50%となっている。また、常設展示の説明などの補助的業務や自主企画運営業務等に市民の参画・協力を得るボランティアシステムを導入しているが、近年は会員の高齢化もあり、活動は縮小傾向にあるため課題となっている。

3 質疑の概要

- ねらいとする年齢層を中高生としているが、実際の入館者は中学生以下が50%という状況についてどうとらえているか。

前の施設の名称は「旭川市青少年科学館」で、そのときは対象年齢層が小中学生だった。現在の科学館を建築する際に、理科離れが進んでいることが大きく取り上げられた時期とも重なり、小中学生だけでなく高校生・大学生・大人にも利用してもらおうということで、科学館の名称も「青少年」を外し、物理、化学、生物など幅広い分野を対象とし、また、展示物も、体験型や大人も楽しめる当時の最新のものを取り入れた。

しかしながら、開館後は高校生の利用が少なく、展示物の内容というよりは、科学館そのものに高校生の関心がないのではないかと考えている。

- 教育委員会として科学館を利用しようという取り組みはどうか。

北海道特有の事情として距離の問題がある。どこの学校の先生も、足（バス等）があれば使いたい学校には足がないという話である。では、足を科学館で用意しようとバスのチャーター代などを予算要求するもつかない状況である。また、学校は、1年前に授業のカリキュラムを組んでしまうので、早めに提示しないといけないのも課題である。

4 調査の成果・委員会としての意見等

- 広大な敷地とさまざまな展示物のある魅力的な科学館であり、特に天文台とプラネタリウムは素晴らしい施設を見せていただくと同時に、開館時の周辺整備計画が変更になる等の苦労話もお聞きできた。高知みらい科学館の整備運営において参考としたい。

- 教育施設として、対象年齢をどのように設定するのか難しさを感じた。また学校教育での利用をどのように促進していくか、本県が関与する「高知みらい科学館」において特に留意すべき点である。

- 「旭川市科学館」は、頻繁に企画イベントを行っており、常に話題を提供し続けている。また当日も小中学生の団体見学があり、開館後10年を経ても役割を果たしていると感じた。しかしながら、設備のメンテナンスにかかるコスト負担の課題や運営に伴う財源確保、特別展の企画が困難な場合の入館者数の停滞など、いくつかの問題を抱えており、こうした点は「高知みらい科学館」の運営の参考としたい。

- この施設は、建築段階からバリアフリーについて当事者の意見を多く取り入れた工夫がうかがえ、本県でも学ぶべき点が多かった。

- 子供たちは、大がかりなデジタル展示物だけでなく、アナログ的な展示物にも興味を示すとともに人気もある。こうした点は、地味ではあっても、子供が興味を示すとともに将来につながるような展示物をよく検討し、設置していくことが必要だと感じた。

調査出張報告書〔総務委員会〕

調査年月日	平成29年9月7日（木）	調査時間	13:30～14:55
調査先	北海道岩見沢農業高等学校	実施場所	会議室
説明者	畠山校長 外	現地視察等	校内見学
調 査 概 要			
1 調査目的 高知県における産業振興計画と連携した地域産業の担い手の育成の参考とするため、また魅力ある学校づくりの参考とするため、北海道立岩見沢農業高等学校の取り組みについて調査を行った。			
2 説明内容 岩見沢農業高等学校では、北海道内の職業学科専門校で初となる、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を平成 25 年度に受け、未来を担う科学的人材の育成、農業科学技術系人材を育成する農業科学教育プログラムの研究開発に取り組んでいる。また、昨年は、秋田県と岐阜県の高校が本校で研究発表会を行うなど、県外の SSH 指定の農業高校との交流も行っている。			
3 質疑の概要			
○ SSH の生徒を選抜する際の基準や本人の意思について、どのようにしているか。 基礎学力試験と中学校の時の成績に加え、生徒のやる気を加味して選抜している。希望者が多く選抜することもあれば選抜のない年もある。現在は、SSH をやりたくて入学する生徒が増えてきており、入ってから非常に努力する生徒が増えている状況にある。			
○ SSH を専攻していない生徒への波及効果のようなものはあるか。 例えば、論文を作成する際に、グラフがない、単純比較しかしていないということもあったが、SSH が行っている数的処理や科学的手法で実験を行っているのを見て、そうした手法を取り入れたりしている。また、教員の指導にも好影響を与えており、相乗効果が生まれている。			
○ SSH の取り組みに係る生徒の負担について支援はあるか。 ハワイ研修は、文部科学省から 7 割くらい支援があり、残りは生徒負担となる。また、検定料は個人負担となる。学会発表や大学に行く費用はすべて文部科学省から出る。			
○ 学校で忙しい中、教員の指導力向上のための研修の時間や費用をどのようにしているか。 大学への訪問や大学から来ていただく費用は、SSH の予算で対応している。時間			

は勤務中も勤務外もある。調整して研修の機会を確保するようにしている。

4 調査の成果・委員会としての意見等

- 研究集録としてまとめられた生徒の論文は、課題選定や内容が大学レベルであり、SSH 対象生徒だけでなく、それ以外の生徒への刺激や影響が感じられる等、学校全体としてのレベルアップにつながっていると感じた。生徒による課題研究とその研究発表、さらにそれを英語で発表する取り組みは、本県の農業高校においても参考になると思われる。

- SSH 等の先進的な取り組みを行っている一方で、教員にとっては大学との連携や生徒指導等、通常勤務以外での対応も多いとのことであり、働き方改革が求められる学校職場にあって、人員体制も含めた体制整備が必要であると感じた。このことは、本県で SSH に取り組む高知小津高校や SGH に取り組む高知西高校でも同様の課題と思われる。

- 岩見沢農高の教員の皆さんは「北海道一の農業高校」であると自負されており、その熱い思いが、SSH の指定に導く力となり、また、しっかり生徒の意見を受けとめた上で学習内容に反映していく姿勢にもつながっており、本県においても見習うべき点があった。

- 広大な敷地を持つ農業高校であり、さまざまな施設等を見学することができた。特に、玄関前ロータリー等で咲く花々はよく手入れされており、生徒の皆さんが本校を大切に思う気持ちを感じ取れた。教員と生徒の気持ちが一つとなって取り組むからこそできるのであり、しっかりとした教育（指導）がなされていると感じた。

調査出張報告書〔総務委員会〕

調査年月日	平成29年9月7日（木）	調査時間	15:50～16:55
調査先	札幌市公文書館	実施場所	会議室
説明者	綿貫館長 外	現地視察等	施設見学
調 査 概 要			
<p>1 調査目的</p> <p>平成32年度の開館に向けて本年度、基本設計・実施設計を行う、高知県公文書館（仮称）の運営等の参考とするため、整備の経緯や整備手法が類似する札幌市公文書館（平成25年度開館）について調査を行った。</p>			
<p>2 説明内容</p> <p>札幌市公文書館は、公文書の管理や利活用の充実強化等を求める「公文書等の管理に関する法律」等への対応等を背景に、旧豊水小学校複合施設に耐震補強工事・建物保全工事を実施し、平成25年7月に開館した。公文書のほか行政資料や地域の資料などを収集し、保存・修復を行い、閲覧利用等ができるようにしている。また「公文書で見る札幌の街づくり」という内容で常設展示も行っている。</p>			
<p>3 質疑の概要</p> <p>○ 来館者数はどのくらいか。</p> <p>日々数人であり、何百人も来るような施設ではない。年間でも2千人くらいである。</p> <p>○ 消火設備はどのようになっているか。</p> <p>消火設備は窒素ガスである。火事が起きると、まず人を逃がしてからガスが出る。酸素を遮断して消すタイプなので、人がいると窒息してしまう。消火後、吸気口からガスを排出する。一時期、水で消火するタイプは資料を破損するという事で、ガス式が多く取り入れられたが、最近は水にぬれてもフリーズドライで乾かす方法があり、水のほうが人への危険も少ないということで増えつつある。しかしながら、設備に要する費用は高額となる。</p> <p>○ 廃棄書類の選別はどのようにしているか。</p> <p>文書保存の最長は30年となっており、書類作成の30年後に審議会で選別をする。毎年11万件くらいを選別している。廃棄するリストはホームページで公開している。</p> <p>○ 廃棄書類の廃棄方法はどのようにしているか。</p> <p>処分は2～3年に1回行っている。焼却でなく融解処理を行っている。</p>			

4 調査の成果・委員会としての意見等

- 来年度から始まる高知県公文書館の改修工事に向けて、公文書館の改修事例を実際に見ることができ良かった。
- 旧豊水小学校複合施設を有効活用して整備された公文書館であり、小学校の転用施設であるだけに床の対荷重の課題等も多く、本県が図書館を転用する場合と違った問題についてもお聞きした。本県の施設整備においても転用に係るさまざまな課題について十分な検討が必要である。
- 札幌市立の公文書館であり、高知県内の市町村においても廃校になった学校を利用して公文書館を整備するなど可能性を感じた。ただし、改修費用の面や運営面での負担や困難はあるので、今後検討が必要である。
- 公文書検索システムやアーキビストの養成など、利用者のために必須の課題となっていることについてお聞きし、本県公文書館でも当然求められることになると思った。

調査出張報告書〔総務委員会〕

調査年月日	平成29年9月8日（金）	調査時間	9:35～11:05
調査先	札幌市立札幌開成中等教育学校	実施場所	会議室
説明者	相沢校長 外	現地視察等	校内見学
調 査 概 要			
1 調査目的 <p>平成33年度開校の高知国際高等学校（平成30年度開校の高知国際中学校との中高一貫教育校）における、国際バカロレア認定や魅力ある学校づくりの参考とするため、札幌開成中等教育学校の取り組みについて調査を行った。</p>			
2 説明内容 <p>札幌開成中等教育学校では、新校舎に教科教室型を採用しており、各教室は教科ゾーンによって区分けされ、生徒は参加する授業教科に応じて教室に移動する。スーパーサイエンスハイスクール・スーパーグローバルハイスクール・国際バカロレアの認定を受けた全国で3校しかないトリプル指定校であり、国際的な感覚と視野を持って社会に貢献できる人材育成に取り組んでいる。</p> <p>学びの特徴としては、探求をしていく、教員が教えるのではなく、自ら学び、また仲間同士で学びあうことが多い。探求、行動、振り返りを繰り返し行うこととしている。一人一台iPadを配付し、自ら調べるとともに仲間とも情報を共有できる一つのアイテムとしている。</p>			
3 質疑の概要			
○ 自分の教室というものはないのか。 朝と帰りに出席を取る教室と給食を食べる教室がそれにあたる。			
○ このような新校舎を建てることになったきっかけは。 前の開成高校は築50年が経ち、老朽化等の問題もあり一気に建て替えを行った。校舎の建て替えというのが一つの転機となっている。			
○ 教室へ移動する際に、生徒たちが荷物を持って移動しているのはどうしてか。 生徒個人にそれぞれロッカーはあるが、離れた教室に移動する場合もあり、ロッカーまで行っていると間に合わない場合もあるので、ある程度の荷物を持ち歩いている。			
○ 各教科の教室ごとに黒板に違いがあるのはなぜか。 数学は、数式を書くために黒板は横に長く、国語は縦書きをするため縦に長い。英語は筆記体で書くためホワイトボードとなる。			

- 高校からの編入はどのくらいか。

基本的にはない。

- 入学倍率はどのくらいか。

開校当初の平成 27 年度は約 10 倍。平成 29 年度は 4.7 倍である。

4 調査の成果・委員会としての意見等

- 国内有数と思われる非常に先進的な学校であり、新築された校舎には 6 学年全てが科目ごとのフロアで学べる教室群など、中高一貫校の特色を最大限に生かすための工夫が大いに取り入れられており、高知県のハード整備を含め大いに見習うべきではないかと感じた。

- 国際バカロレアの指定を受けた学校を実際に見て、授業見学もできたことから、イメージがつかめた。国際バカロレアの指定が目的ではなく、本校の向かうべき方向に国際バカロレアが合致していたので指定を受けた、という校長先生の言葉に感銘を受けた。高知国際中学・高等学校の取り組みにおいて参考にしたい。

- 高知国際中学・高等学校でも認定を目指す国際バカロレアについて、本校の校長や教員の皆さんの話をお聞きし、また生き生きと仲間同士で探求的な学習や国際人教育に取り組む子供たちの様子から、新しい教育のスタンダードを見たように感じた。

- 教員が一方的に話をするのではなく、生徒同士が相互にコミュニケーションを取り合い、それぞれの得意不得意も補いながら課題解決をしていく様子に感動した。生徒が自分たちで調べ、生徒の自発的で自由な発想や手法を最大限に発揮できるように教員はサポートする。そんな学び舎の光景の中で子供たちの笑顔と真剣な目つきに感心し、教育の新たな基準、教育とはなんぞや、その答えを見たように感じた。

- 「じっくり学び、しっかり身につける」ことによって「生涯にわたって学び続ける力」を身につけようとする「わたし、アナタ、min-na」の姿がうれしいという学校の教育方針に期待した。

- 教員の皆さんは、プレッシャーや苦勞も多いとのことだが、その努力は子どもたちの「学ぶことが楽しい」という評価に表れており、それが教員のやる気につながっていると熱く語ってくれた現場の教員に頼もしさを感じた。いずれの学校でも、新たなことにチャレンジするためには、学校長をトップとした確固たる学校運営方針が示され、教育委員会や保護者会等も含めて共有されることが重要であると感じるとともに、せっかく取り組むならこれまでにない工夫と情熱が必要であり、人口減少下で統廃合が進む高知県の学校においても、これらの取り組みを少しでも生かしていく必要性を感じた。